

子どもへの関わりに対する母子双方からみた理解
— 社会人の子どもとその母親を対象にしたインタビューから —

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
遠藤 祐希

本研究の目的は、幼少期から現在に至るまでの子どもへの関わりに対する母子双方からの視点の理解を明らかにすることであった。

母親は【進路】で“子どもに決定権”が移行するか母親の“価値観のもと誘導”したままかという違いは子どもの【成長】を感じ【子どもの今後を見越す】ことができるかどうかにかかっていた。一方、子どもも自分自身が“この子なら大丈夫”と母親から思われれば“自由にさせてもらえる”と感じていた。両者は同様に、母親から子どもが一人前と認められれば子どもが物事を決定することができると考えている、という点で共通していた。

しかし、子どもが【戦略】的に母親の“人として譲れない”ことを守ることで“自由にさせてもらえる”ようにしていたことに母親は気づいていなかったという点が異なっていた。

青年期の始まりである第2次反抗期は、アイデンティティの確立にとって必要な要因であると述べる者も多い。しかしながら本研究からは、子どもに子ども自身の事柄の決定権が渡るといふ、子どもの自立につながるさまは子どもの反抗によっては得られていない。

これまで一般に言われてきた子どもの自立を『戦って勝ち得る自立』だとすると、表向きは母親にとって好ましい人柄を演じ、母親からの信頼を得て自分自身のことは自分で決められるようになる、という本研究における自立は『装って出し抜く自立』だと呼ぶことができるだろう。